

## こどもと、おとなのための、礼拝堂

牧師 山本 護

裏の林に作られたツリーハウスが「こども礼拝堂」と名づけられました。おとなが一人「デボーション (devotion/敬虔に心を整える)」するのに、ほどよい狭さと暗さ。名目上は礼拝堂ですが、こどもたちが礼拝をするには不向きな狭さと、暗さです。

「心に神秘を持っている限り、人間は健康であることができる。神秘を破壊する時、すなわち狂気が創られる(『正統とは何か』)とG.K.チェスタトン(1874~1936)は言った。チェスタトンは「平常平凡な人間がいつでも正気でいられたのは、いつでも神秘家であったため」だとし、ごく普通の調和した生き方の根拠を「一方の足を大地に置き、一方の足をおとぎの国に置いて来たからである」と述べています。

「一方の足を大地に、もう一方の足をおとぎの国に」。正気とは逆に、身近なクリスチャンの狂気を想像してみる。米国キリスト教原理主義の教会が、アフガニスタンへの爆撃やイラク戦争を「義戦」として煽り立てたのは、神秘を失って狂気に陥っていたからではないか。そういえばあの時、彼らが唱える神の御心や聖句があまりに明快過ぎて、これではどうてい、神秘を未知のまま抱えられないだろう、と予感していました。

八ヶ岳教会のこども礼拝堂は、教会学校という明るい「大地」のためというより、心の暗部に「おとぎの国」を涵養するのに適しています。こどもたちの未知なる可能性には、仲間とのダイナミックな関係だけでなく、自分だけの孤独な陰影が不可欠です。これは、おとなになっても然り。

続けてチェスタトンは人間の正気についてこう語っています。「大事なのは真実であって、論理の首尾一貫性は二の次だった。かりに真実が二つ存在し、互いに矛盾するように思えた場合でも、矛盾もひっくるめて二つの真実をそのまま受け入れて来たのである」。



「彼は、子供たちを知恵の保護の下に置き、知恵の枝に守られて夜を過ごす(旧約第二正典シラ書14:26)」。「彼」とは「知恵の秘密を深く考える人(14:21)」のこと。こども礼拝堂はそうした神の深い知恵が保護され、自然に育てられる場になってほしい。

こども礼拝堂は子供たちだけのものではありません。おとなにとっても、デボーションによって「おとぎの国」、つまり未知なる神秘を己が内に想起させる場。それから、もう一方の足場であるこの「大地」を、キリストの平和で満たすために働くのです。Ω